

## 平成24年度 阪神北地域夢会議・さわやかフォーラムの概要

- ◆日 時：平成25年2月24日（日）13:00～16:00
- ◆場 所：伊丹市 スワンホール
- ◆参加人数：117名
- ◆主 催：阪神北地域ビジョン委員会、阪神北県民局

### 1. 開催趣旨

阪神北地域の将来像を描くため、阪神北地域ビジョン委員会と阪神北県民局が協働して、阪神北地域の地域課題を県民参加で討論する。

今回は、「語ろう 思いやりのあるまちづくりを」を主テーマとし、①「温かいコミュニティをつくるために」と②「無縁社会を防ぐために」をサブテーマに、住み慣れたまちで安心して生活が続けることや地域でのふれあいをつづけていくためにはどんな工夫が必要なのか等の課題について議論する。

### 2. テーマ「語ろう 思いやりのあるまちづくりを」

### 3. プログラム

- (1) 開会あいさつ 阪神北地域ビジョン委員会委員長  
内堀 克子
- (2) グループ討議のすすめ方について  
阪神北地域ビジョン委員会副委員長  
八木下 榮一



- (3) グループ討議  
サブテーマごとに6グループずつに分かれて討議
  - ①温かいコミュニティをつくるために
  - ②無縁社会を防ぐために
- (4) 全体会
  - ア 来賓あいさつ 藤原 保幸伊丹市長
  - イ グループ討議の結果発表



#### ① 「温かいコミュニティをつくるために」

##### 今井専門委員

日常生活の中で困難が生じた場合の援助のシステムについて、例えば、伊丹市ではシステムが充実しているという話があった。しかし、その中でもやはり問題はいくつか起こっている。例えば個人情報の扱いというのが非常に難しくなっている。あるいは日常的なつながりが薄いという問題。これは地域に



よって差があると思うが、いわゆる「縁」という言葉で述べられていた。「縁」といってもいろんな縁がある。仕事上の「社縁」といわれるものもあるし、地域の中での「地縁」というものもあるし、またもう1つ「血縁」というものもある。かつ

ては「血縁」と「地縁」という強いつながりがあったが、現代社会では「社縁」という形のつながりも我々の行動を規制する要素となっている。

まだまだいろんな問題があるという認識は皆さん共有されており、その解決策として何があるかということについては、結局、日常的なつながり、日常的な「縁」というものが重要であるという点で、皆さん意見が一致していたようである。ただ、具体的にどのようにして「縁」を強くしていくのか、深くしていくのかという点については今後の宿題となった。

#### **滋野専門委員**

地域内コミュニティの交流促進ということが大きな1つのテーマとなった。交流促進には2つあって、1つは世代間交流。それから地域内における新住民と旧住民の交流がある。地域内の住民間の交流については、この地域では農業が近郊で行われているということから、農業とのふれあい体験によって地域間の住民のつながりを持つとか、イベントに参加することによって地域間の交流を深めるというような方策があるのではという意見が出された。



また、若者のメンバーが多いグループでは、若者が地域の自治会に参加意識を持っていないということが問題ではないかという意見が出された。そこで、自治会への参加意識又は関心を広めるにはどうしたらいいかというのがそのグループでの中心的なテーマとなった。無関心になる原因には大きく分けると、①面倒くさい。②自治会に入ると負担感ばかりでデメリットしかない。③入らなくても生きていけるというようなことがあげられた。若者はそういう感覚でものを見ている。実際に顔を見ることがないし、実際に地域にどのような人がいるかもわからない。それに対する解決策として、①今、回覧板はポストに入れてしまう。それではダメではないか。ともかく手渡しする。それによって顔を少しづつつなげていくということや②声かけやあいさつによって適切な間隔を持ち続けるということ、③交流の場の設置というのも非常に大事だろうということ。さらに、④行政による自治会への加入促進。自治会に加入することを促進する行政の力も必要ではないかという提案があった。

若者は、最近では Twitter や Line などのコミュニケーションツールを頼って、直接コミュニケーションをとることが上手ではない。しかし直接コミュニケーションをとることによって得られる情報価値というのを何とか考えていくことが世代間交流につながるのではないかという意見も出ていた。この会議にも若者が参加している。これこそコミュニティを作り出すためのきっかけであって、こういう会議に参加してくれる若者が大事だという意見が出された。

コミュニティの担い手というものが本当に育っていない。自治会長を同じ人が何年も続けざるをえない状態がある。これについては、人材育成をする仕組みの大切さを自治会の中でも考えていく必要があるということを感じた。

最後に、まとめとして、柔らかい絆をどう作るかということが大切だと感じた。きついバインドはいやという人は多いが、柔らかい絆を何とかつなげていきたい。最終的に個人では温かい心をどう持つか。1人1人が温かい心を持たないと温かいコミュニティはできないわけだから個人の心の持ちようも大切ではないかと感じている。

## ② 無縁社会をつくらないために」

### 武田専門委員

今日の議論を3つの標語にまとめてみた。

1つめは、「半分こ みんなで分け合う 共有の場」

今日の夢会議の場がまさにそうだと思うが、日頃皆さんが日常生活の場で抱えている課題やチャレンジしていることを今日のこういう場で集まって話し合えたということが1つの成果だと思うし、喜びでも悲しみでも地域の中で共有できる場づくりというのが大事じゃないかという議論があった。具体的には①趣味のサークルをもうちょっと活用できないかだとか、



②個人個人の特技を生かした学習会みたいなものがたくさんできればいいんじゃないかとか、③ラジオ体操なども高齢者が元気で過ごす重要な場になっているとか、ちょっとしたきっかけで家に閉じこもっていることなく外に出てきて人とふれあって何かを共有していく。そういうことについて、他人の問題としてではなくて自分たちのこととして考えて生きるということが重要なのではないかという意見があった。

2点目が「信頼の関係を育てる声かけ、見守り」ということ。

どこのグループでも話があったが、声かけをすることで無縁社会がなくなるんじゃないかという具体的な行動の提案、今日いろいろ議論をする中で自分が明日から何が出来るのかということをお皆さん真剣に考えておられて、そういう中で声かけ、地域での対話ということが大事じゃないかという意見が共通して出てきたのが印象的であった。

また、日常的な交流を実践することによって、ちょっとした高齢者の生活の変化に気づくことが出来るのではないかという意見があった。例えば今日参加の100人の皆さんが10人に声をかけると1,000人のネットワークができあがることになる。その1,000人からはじめて、その方々が10人に、そして10人に、また10人と、例えば3回声かけの輪がつながれば、もうこれで100万人になる。「おはよう」と「こんにちは」と「こんばんは」と3回ごあいさついただければ、100万人のヒューマンネットワークができあがるんじゃないかと思う。

最後は「来たるべき未来につなぐ 世代のバトン」。

① 都市だけではなく郡部でも無縁社会が広がっているんじゃないかということとか、②老老介護の厳しい現状があるという問題とか、③若い世代と高齢者とがどういふふう交流できるか、④新旧住民の問題もかなり取り上げられ、いかにして新しい住民との交流の場が持てるかなど問題が取り上げられた。こういうことは次の世代にも受け継がれる問題なので、今日の議論で得られた課題とかそれに対するアプローチをどのようにつないでいくかというようなことが重要ではないかという議論があった。

## 住井アドバイザー

これまでの話を聞いて、無縁社会、声かけ、交流という3つの団子が串刺しのようになっているのではないかと感じている。

- 具体的には、①閉じこもり・引きこもりの人が多い。  
②お年寄りが多く、人と人との会話がなくなっている。  
③出不精になっている人が多い。④男性の単身高齢者の居場所がない。⑤老人が大変住みにくい町ではないか。⑥自治会に入会する人が半分くらいになっている。  
⑦人とのつながりを求めず、助けを求めない人がいる。



⑧病院に連れて行く手助けをしたいが、どうすればいいかわからない。その家庭の中に入ることの理解が大変難しいなど、個人情報保護の関係で情報が入ってこず、これがハードルとなり、助けを求める人と助けてほしい人がうまくマッチングしない状況が出ている部分があると感じた。

そのあと、参加者からこういうことが大事ではないかという意見が出された。具体には①自治会の活性化、②校区内の自治会のつながりの強化、③民生委員の活性化、④住民の生活状況を地域住民みんなで把握できるような仕組みづくり、⑤声かけ運動、あいさつ運動の推進、⑥お年寄りを把握することの大切さ、⑦民間と行政の連携の強化、⑧民生委員、自治会、ボランティアの連携強化、⑨井戸端会議の機会増加。

そういう中で、ある方から、地域包括支援センターについて、地域の皆さんが知っているのではなくて一部の人だけが知っているという話をされた。私自身、昨日偶然ネットを見ていてこういうものがあるんだと気づいた。自分自身でアンテナを立ててはいるけれども、それを感知する能力がないとなかなか情報は入ってこない。自分自身が情報をつかんでいく感性を磨いていく必要があると感じた。

最終的には「つながりと絆の再生」。人と人とのつながり方を模索していくことがこれからは大切だと感じた。

## ウ 意見交換（進行 芳田専門委員）

- 私の近隣には独居老人がものすごく多い。私も実は独居老人である。普段は怖いから中から鍵をかけている。何かあったときに、携帯で知らせても入ってこれない。そういう人が結構いるんじゃないか。それをどうしたらいいか。私はたまたま近所に親戚がいるから、そこに鍵のある場所を連絡しているけど、そうでない人は、もし家の中で何かあったときに、どうやって外部の人が入っていけるのか。これを私は心配している。



- 私の所属している社協では、信頼の置ける民生委員の方が、独居老人ときちんとお話をされて、鍵を持っておられる方もいらっしゃる。鍵を預けることについては、本当にすごく信頼度が高くなければダメである。隣でも信頼がなければダメ。本当は民生委員がきちんと対応されることが一番いい。ただ、民生委員の仕事はほかに

もいろいろあるので、行政側がどういう形で民生委員を支援していくかということも課題。

○阪神・淡路大震災からの復興県営住宅を作るときに、被災者の方は高齢の方が多く、また、单身者も多いということで、単に箱を作るのではなくてシルバーハウジングというサービスを付加した住宅を作った。先ほどの鍵の問題については、内からだけでなく外側からも開けられる鍵にされていて、あらかじめ県が鍵を持っていて、何かあったときには外から開けられるとか、トイレを長時間使っていないと警告がいくとか、いろんな独居老人対策をやった。当時は、将来の高齢化時代のモデルになるということでいろんな仕組みを作ったので、その中でうまくいったものについては広げていけばいい。これからの時代、単身高齢者の住宅をどうするのかというのは大きな課題である。

○さきほどおっしゃったような住宅が広がればいいと思うが、その広げ方について、大手デベロッパーが分譲マンションを建てる時に、デベロッパーが入居者にその了解を取るということを建築の条件にしたらどうか。例えば入居者に75歳以上の人がいたら必ず鍵を管理者が持つということ。少しずつ出来る範囲からこうしたことを進めていくことが独居老人対策になるのではないか。



○無縁社会の中で、年寄りだけではなくて、若い子が挫折したり、登校拒否になったりして引きこもりになっている。こうした子たちを地域で支えていく必要がある。壮年層でも、例えば30代の方でも退職して行き先がなくて、いろんな問題を起こしている事例もある。この辺に目を向けて、向かい隣、両隣がそういう情報を吸い上げたり、自治会名簿を密度の濃いものにして次に引き継いでいくとか、そういうことが出来たらいいと思っている。

○昨年うちの町会で10人が亡くなられたが、2名の方が孤独死している。立派な家を持っていて、経済的にもすばらしく、身内もいる。ところが、身内の息子さんや娘さんがみんな外に出てしまって、電話で確認はしているんだろうが、亡くなって3日目くらいにわかったようなことがあった。根本的な対策はないが、今日のテーマである「温かいコミュニティをつくる」ということにつける。温かいコミュニティをつくるということは、結局ご近所のおつきあいがないと、何らかの形での意思の確認とかご挨拶とかそういうものがない限り、絶対に温かいコミュニティなどできない。

私も民生委員をやったことがあるが、民生委員もピンからキリまでいる。厚生労働省の出されている民生委員の憲章かなんかを読むと、立派なことが書いてある。だけど、現場で民生委員が本当にそれをやっているかとなるとそうではないということが目に付く。老人会や子ども会、婦人会なども活動が差規模取りの傾向だ。ご近所で、地域でみんなを守ろうという方々の人数が少なくなっている。地域の住民が立ち上がるしかないと思う。

その中で何かをしようとする行政の壁が邪魔をする。市役所へ行くとたらい回しにされてトータルな情報を提供する部署がないというのが現実だ。行政の情報をきちっと取れる体制をとってもらいたいということと、地域のことは地域で心ある人たちを見つけグループを組んで対応していくことが最終的な方法だと思っている。

○私は自治会長をしていて、1人暮らしの方は民生委員さんが把握してくださっている。そこで、民生委員さんに1人暮らし老人の現況を聞くように心がけている。ただ、今日の会議に出ていて、見過ごしているなあと感じたことがある。それは、「おい元気かい」って昨日まで声をかけていた人が2～3日姿を見なくても平気で過ごしているという事実。地域としてどうやってそれをリカバリしていくかということが「孤立」「無縁」をなくしていくことになる。また、これが地域力になるのではないかと感じた。

いずれにしても、民生委員だからとか行政だからとかいうことではなくて、自分は何が出来るのか。やったかやらないかだと思ふ。これが地域力だと思ふ。気がついたことは小さいことかもしれないが、1つ1つ片付けていくことが必要だと思ふ。

○うちの近所はものすごく庶民的なところで、隣同士の間がちょっとしか空いていない。テレビの音も聞こえるし、隣の電気の明かりも見えるし、洗濯物も見える。1人暮らしの方については、私の家の向こう3軒両隣については、自分が把握することになっている。向こう3軒両隣の洗濯物がないときは「どうしたの？」って声をかける。明かりがついてなかったら「タベどうしてたの？」ってお節介がましく声をかける。それが、うちの向こう3軒両隣、隣の向こう3軒両隣とつながっていけば、すべての家がつながるんじゃないか。民生委員とか、市とか、自治会の役員を頼るんじゃないかなくて、自分自身が自分でできることを一歩ずつ広げていけば、みんなつながるんじゃないかなあと思っている。

#### (5) 井戸知事コメント

今井委員の話にあった「縁」を作るのに決め手はないというのは間違いないと思う。みんな地域で努力されている。そういう努力の事例を交換できるような仕掛けが出来ればいいという思いがした。

先日、神戸の北須磨団地を訪ねた。淳ちゃん事件があったところだが、そういう事件があった所だからこそ、余計に地域の団結心が強くなっている。サラリーマンを退職した人たちが「現役の時は家庭を顧みず、子育ても全然出来ずに地域のお世話になった。今度は自分ができることを地域に恩返ししたい。」とおっしゃって、とても活発な活動を役割分担してやられていた。地域活動の1つの典型を見せていただいた。



各地域でいろんな活動に取り組まれているので、そういう情報を集めて発信する仕組みを作ればいい。皆さんも阪神北で自治会や（その他の）活動のフェイスブックを作って、自分たちで活動ぶりをアピールする場を作ればいいのではないかな。

武田委員から説明のあった無縁社会の話では、関係づくりがポイントだ。新旧の住民の関係づくり、世代間の関係づくりもそうだが、同じ地域で活動をしているグループ同士の関係づくりも必要だ。関係づくりというのは、同じ場に集まらないから難しい。事務所を同じ場所に作るだけでも違う。県民交流広場を作ったのは、そういうねらいもあった。活動をみんなで一緒にやろうというのは無理。活動はそれぞれ違う。だけど、他のグループの活動内容を知る機会をどのように共有するかというのが大切なことである。常時集まらなくても、月に1回でも、半年に1回でも、1つの所に集まる機会を呼びかける。皆さんのように活動されている方やビジョン委員会がそういう呼びかけをしていただくと、関係づくりのスタートが切れるのではないかと感じた。

住井アドバイザーの報告の中で包括支援センターが出てきたが、私は、包括支援センターが十分機能を発揮しているのかどうか気になった。それは、（包括支援センター）が介護保険にお世話になっている人だけの相談センターになってしまっていて、これから介護保険のお世話になる人の相談センターになっていないのではないかという感じがしたためである。介護サービスを受けている人やその家族には当てにされているが、どうも他の人は当てにしていない。なんで包括と言うかということ、現にサービスを受けている人のサービスをプログラム化するからではなくて、地域の健康づくりを推進する拠点機能を果たすからである。どうもそういうことについて（包括支援センターの業務を）担っている人もちょっと認識が欠けているし、われわれも包括支援センターが本来の機能を発揮するよう努力する必要があると思っている。

独居老人対策についてはいろんなことをやっている。ただ、やっぱり1人暮らしは事件が起きる。事件が起きたときの対応が必要だ。たとえばあるメーカーは常に独居の人を追っかけて、その人が動かなくなったら連絡をするようなシステムを作っている。私の母親が横浜に1人で住んでいるので、それを付けようかと思ったら、常時監視するつもりかと怒られた。やっぱり、ずっと見張られているというのはあまり気持ちのいいものではない。このあたりの配慮が必要だ。ただ、そうすると対応が若干遅れる可能性がある。これをどこまで許すのかというところがシステムを作るときの論点となると感じた。

最後に、やっぱり「声かけ」は重要だ。「声かけ」をしている地域には「こそ泥」は絶対に入らないと言われている。声をかけられると「こそ泥」はおどおどとするらしい。また、それだけ緊密な地域関係が築かれているところだと思うらしい。私も県庁まで行く間、全然知らない人に常に声をかける。半年くらい経つてくると反応が返ってくる人も出てくる。反応が返ってくると楽しい。よく安全パトロール隊の皆さんが登下校の時に子どもたちに声をかける。最初のうちは子どもも警戒心が強かったのが、同じ顔を見せていると「おはよう」と向こうから言ってくるようになる。こういうのがスタートかもしれない。もう一つわれわれがやっているのが「障害のある人に対する声かけ運動」。特に目の悪い人は、病院に行こうとしてバスから降りた時にどっちへ行ったらいいのか戸惑う。そういう時に「声かけ運動です」と言って、「どちらに行けますか」と言うと素直に対応してくれる。ちょっとした思いやりが潤滑油になる。これが現代社会で欠けている部分かもしれないので、ちょっとした思いやりを社会の中でどのように実践していくか。これが重要ではないか。こうしたことを皆さんが子どもたちに教えていただいたら、子どもたちが大きくなってまた自分の子どもに教えるはずである。今日みたいなお話し合いを重ねていただいて、磨きをかけていただいたらありがたいと思う。